

2015年ベイルート会議 (ISCACH : Beirut 2015) 後の シリア文化財救済支援について

西藤 清秀

Safeguarding Syrian Cultural Heritage: JSWAA's Efforts after ISCACH 2015

Kiyohide SAITO

1. はじめに

日本西アジア考古学会は、シリア文化財関係者を励ますと共に、シリアを調査地とする調査代表が集い研究成果を交換する場として、市民、会員、文化庁の支援のもと2015年12月3日(木)から6日(日)にレバノン・ベイルートにおいて「シリア考古学・文化遺産国際会議」“International Syrian Congress on Archaeology and Cultural Heritage (ISCACH : Beirut 2015)”を開催した。この会議では、シリアからの参加者を含め、参加者全員が非常に有意義な時間を共有した。この会議の様子については『西アジア考古学』第17号にて報告したが、本号ではベイルート会議 (ISCACH : Beirut 2015) 以後の日本西アジア考古学会のシリア文化財救済支援の取り組みについて報告する。

2. シリア支援の内容

2015年11月末に Archaeological Museum, American University of Beirut (AUB) においてパルミラの葬送用胸像の3次元画像を作成するための写真撮影を実施し、翌2016年3月8日(火)にその画像成果をAUBのレイラ・バドル (Leila Badre) 館長に届けに行った。この機会を利用し、シリア古物博物館総局博物館局長のアハマド・ディーブ (Ahmad Deeb) にベイルートに来てもらい、持参した文化財梱包用資材の薄葉紙 (1,600m) を手渡し、また今後のシリア文化財救済や支援について ISCACH : Beirut 2015 の主催者の一人であるレバノン大学のジャンニ・アブドゥル＝マシフ (Jeanine Abdul Masih) も加わり、話し合った。

この会合では、ISCACH : Beirut 2015での発表者に依頼した発表内容の書籍による出版やシリア側の第2回のISCACHの開催の要望に対してどのような方向性を見出し実施するのか意見を交換した。この時シリア側から文化財のドキュメンテーション保存の中で、展示品・出土品についてはほぼ終えようとしているが、写真・フィルム等の媒体のドキュメンテーションがまだ手付かずの状態であること、保存のためにはフィルムスキャナーが不足している

という発言があった。そのため、学会はアブドゥル＝マシフにベイルートでスキャナーを1台調達してもらい、シリア側に引き渡し、後日、スキャナー代金は彼女に立替分として支払うことにした。また、2016年8月28日(日)～9月2日(金)京都・同志社大学今出川キャンパスで開催される第8回世界考古学会議京都大会 (World Archaeological Congress 8 Kyoto) においてシリアの文化遺産の危機に関するシンポジウムを立ち上げるため両名に協力をお願いした。日本西アジア考古学会は、シリアを含めた西アジアの文化遺産の紛争における危機に関わるセッションをWAC8 Kyotoにて立ち上げ参加することは、世界規模の考古学会が日本で開催される機会において責務とであると考えていたため、両名の参加は絶対条件であることを強調した。

このシンポジウムの内容に関しては3月にベイルートに赴く時点では常木晃副会長(当時)、西山伸一会員が練り、シリアを含めた戦乱の中で文化遺産がいかなる状況であったかを当事国であるシリア、レバノン、イラク、アフガニスタンに深く関わっている研究者に発表をお願いすることにした。WAC8のセッション申し込みが締め切られる5月までは西藤が学会会長の任についていたことから、西藤の名でシンポジウムを申し込むことにした。しかし、この話し合いの最後にディーブが「西藤、1週間ほど後にパルミラに行く」と言った。この言葉に耳を疑ったが、3月17日(木)に実際、パルミラはシリア・ロシア軍によって奪還され、4月に彼はパルミラの地に立っていた。これにより、WAC8でのシンポジウムの内容を変更することになった。4月21日(木)～23日(土)にポーランド・ワルシャワ大学で開催されたハーレド・アサッド (Khaled Asa'ad) 前パルミラ博物館館長追悼パルミラ研究会に参加した。研究会前日の20日、友人のロバート・ジュコウスキー (Robert Żukowski) とバルトシュ・マルコウスキー (Bartosz Markowski) に会った。彼等は19日に、パルミラから帰ってきた直後で、パルミラの写真を見せてくれた。二人は、4月7日(木)からシリア古物博物館総局アハマド・ディーブと共に約2週間パルミラに滞在

し、破壊された博物館の記録・精査と最小限の修復作業を行った。見せられた写真は、人っ子一人いない街並みに、ISに爆破された神殿、破壊された博物館など、あまりにも無残で想像を絶する惨状に絶句した。そしてこの時、この現状を日本に紹介する必要性を強く感じ、帰国後、常木副会長に相談し、WAC8 Kyotoにおいてパルミラの現況をワルシャワ大学のロバート・ジュコウスキーに発表してもらうことにした。

7月28日(木)～8月3日(水)にかけてレバノン・ベイルートに出かけ、シリア日本大使館の松本太臨時代理大使、シリア古物博物館総局総裁のマムーン・アブドゥルカリム(Maamoun Abdulkarim)、ディーブと会合を持った。この会合ではシリア側は現在、文化遺産支援に関して何を望んでいるのかを聞いた。シリア側は、最近まで紛争がない地域では学術的な発掘調査を実施していたが、調査によって大量の遺物が出土し、それらの記録化には時間がかかる。しかし、記録化より他の文化遺産保護のために時間を費やした方が良く考え、古物博物館総局として、今後発掘調査は実施しないことを決めたという。そのため発掘調査等の研修・訓練はそれほど必要ではなく、若い文化遺産関係者に内戦終了後に必要となる文化遺産の展示活用のための知識・技術を習得させることが一番必要であり、そのため日本にも博物館において展示、保管、修復等の長期的な研修を、さらには今後の遺跡の管理や修復・復元において非常に重要な3Dレーザースキャニング機材の提供と技術者の養成をお願いしたいとのことであった。実際、昨年度からUNESCO等によってレバノン・ベイルートにて3Dレーザースキャナーの取り扱いの研修が実施されているが、機材の提供もなく、数日間での取り扱い研修であり、実質的には機材の利便さは理解できて、実際の取り扱いについては全く習得できていないのが現状である。これではシリア国内にいくら平穏な日がやってきても自らが3D計測を出来ない状況となるのは明白である。それゆえ、今からシリアの若手の3Dレーザースキャナー技術者の養成が必要であり、日本はこの分野では大いに貢献できると伝えた。その際、松本臨時代理大使から、今までUNESCOが文化遺産関係の支援に寄与してきたが、文化遺産関係者の人材育成という視点に立てば、UNDP(国連開発計画)も支援の窓口になれるのではという意見が出て、シリア側も納得した様子であった。今後の日本のシリア支援が少し多角化する可能性はあると見た。

また、アハマド・ディーブとジャンニ・アブドゥルマシーフにはWAC8 Kyotoに関して発表者や発表内容について説明を行い、さらに9月1日(木)に奈良県立橿原考古学研究所における一般向けのパルミラの現状に関わる講演と9月3日(土)の東京・池袋の古代オリエント博物館

におけるWAC8 Kyotoのシンポジウムの内容の一般向け講演をお願いし、了承を得た。

3. WAC8 Kyoto、奈良・橿原、東京・池袋でのシンポジウムの内容

我々は、WAC8 Kyotoセッション“T15: War and Conflict”に“Future of the Syrian Cultural Heritage under the Crisis: Considering the Framework for the Post-war Rehabilitation”というタイトルでシンポジウムを応募し、参加することになった。発表は、現日本西アジア考古学会会長・常木晃(筑波大学)がこのシンポジウムの趣旨説明として「シリア文化遺産の未来を考える」、アハマド・ディーブ(シリア古物博物館総局)が「シリア文化遺産の現状と将来への展望」、ジャンニ・アブドゥルマシーフ(レバノン大学)が「隣国の危機：レバノンから見たシリア文化遺産の状況」、ロバート・ジュコウスキー(ワルシャワ大学)が「パルミラ救済プロジェクト」、西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所)が「シリア文化遺産の将来：パルミラ文化遺産への日本の取り組み」、松本健(国士舘大学)が「イラク文化遺産の復興における日本の貢献」を行った。

シンポジウムは、8月30日(火)16:40～18:40の2時間が割り当てられ、西山伸一(中部大学)の進行のもと、各自15分を目処に発表を行い、残りの時間を質疑応答に当てることにした。このシンポジウムには約45名余りの参加があり、WAC8全体のセッションの中でも最も多い参加者数のシンポジウムとなった(図1)。さらに聴衆はほとんどが外国人であり、質疑応答は発表時間が伸びたため、ほとんど取れない状態であったが、参加者から非常に有意義で重要なセッションであり、時間を延長しても質疑応答は実施すべきであるという意見が述べられ、実行



図1 WAC8 Kyotoにおけるシンポジウムの様子

委員会の了解を得て3つの質問を受けることになった。最初の質問は、ディーブに対してシリア国内での文化遺産についての情報入手についてであった。ディーブはIS支配地域を含めた非政府組織支配地の情報入手は困難であるが、それらの地域を含めて全国に2,000人余りの古物博物館総局の職員がおり、様々な手段で情報入手に努力していると答えた。二番目の質問は、開発による伝統的な建造物の破壊に関してアブドゥル＝マシーフ氏にあり、彼女は、放置された建造物は経済的・家族関係に大きな問題があり、破壊されることが多いと答えた。三番目は、松本健の発表に対してイラクの状況が理解でき良かったというコメントであった。

このWAC8 Kyotoでのシンポジウムは、研究者を対象としていたため、一般の人々にシリア、レバノン、ポーランドから招聘した研究者の話を聞いて頂く機会がなかったため、WAC8会期中ではあったが、9月1日(木)奈良県立橿原考古学研究所において一般向けの講演会「シリア・パルミラの現状を考える」を開催した。この講演会はパルミラの現状に焦点を当て、アハマド・ディーブが「パルミラの現状と将来」(通訳:原田怜(金沢大学))とロバート・ジュコウスキー(通訳:西山伸一(中部大学))が「パルミラでのポーランドの現在の取り組み」と題して講演を行い、平日の昼間にも関わらず100名を超える参加があり、パルミラの実情に涙する人々もいた。

さらに東京においては日本西アジア考古学会と古代オリエン特博物館が主催し、9月3日(土)に一般向けの講演会を行なった。この講演会は、「危機にひんするシリアの文化遺産の未来を考える—文化財博物館総局職員をむかえて」と題して実施された。基本的にはWAC8 Kyotoでのシンポジウムとほぼ同じ話の内容であるが、異なるところはワルシャワ大学のロバート・ジュコウスキーが中国訪問のために抜け、主催である古代オリエン特博物館の津村眞輝子が新たに古代オリエン特博物館のシリア調査と日本でのシリアに関わる試みについて発表を行った。司会は西山伸一が務め、発表は常木晃「講演会の趣旨説明ならびに近年のシリア文化遺産に関する日本の活動」に始まり、津村眞輝子「シリア調査と古代オリエン特博物館」、アハマド・ディーブ「シリア文化遺産の現状と未来に向けての展望」、西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所)「パルミラ遺跡の復元計画からみたシリア文化遺産の未来」、ジャン・アブドゥル＝マシーフ(レバノン大学)「レバノンから見たシリア文化遺産の未来」、松本健(国士舘大学)「イラクにおける文化遺産保護のための日本の活動」の順で行なった。この講演会には150名余りが参加し、非常に熱気溢れる講演会となった。通訳は原田怜(金沢大学)が行った。またこの会には在日本シリア大使館のワリフ・ハラビ

(Warif Halabi) 臨時代理大使が出席して下さり、会冒頭に文化遺産が人類共通の財産であることや日本のシリアへの文化遺産への支援への感謝を述べられた。

4. WAC8 Kyotoのシンポジウムの主旨と各発表者の要旨 (シンポジウムの主旨と各発表者の要旨は、記者・発表者による文章)

セッション名「T15G: War and Conflict」

シンポジウム題名「内戦下のシリア文化遺産の未来：戦後の復興を目指して」

西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所)・常木晃(筑波大学)・西山伸一(中部大学)

2011年以来数多くのレポートが、シリアにおける文化遺産が深刻な破壊の危機にさらされていることを世界中に知らせてきました。内戦勃発から5年が経ちましたが、その状況は全く好転していません。それどころか、シリアの政府機関やNGO、国際学術団体など様々なグループが努力を重ねているにもかかわらず、文化遺産をめぐる現状は、ますます悪化しています。このシンポジウムでは、シリアの文化遺産のこれからの守護者とも言うべき、シリアや国際社会の若い世代に対する教育などを含めて、シリア文化遺産を守っていくために将来必要なことと内戦後の枠組みについて議論の焦点を当てたいと思います。

2011年以来、様々な国際会議やシンポジウム、ワークショップが組織され、遺跡をはじめとするシリア文化遺産の悲劇的な状態について議論を重ねてきました。しかしながら、文化遺産を守り、復興し、その魅力を高めていくための未来の枠組みについて議論されることはほとんどありませんでした。私たちは、現在得られる限りの情報に基づいて、シリアの友人たちとともにシリア文化遺産の未来について討論する機会を持ちたいと考えました。さらに、レバノンやヨーロッパからの専門家を交えて、より多様な視点から議論を深めていきたいと考えています。シンポジウムでは、文化遺産の管理と記録、デジタルアーカイブなどにも焦点を当てていきます。

さらに、戦争や内戦という時代にダメージを受け破壊された文化遺産に対して、考古学者や歴史学者は何をすることができ、かつすべきなのかについて考えていこうと思います。この問題は、短期的および中長期的な2つのスキームで考えることができましょう。シンポジウムは日本で開催されますので、私たちは日本の専門家に、シンポジウムに積極的に参加し、イラクやアフガニスタン、その他のアジアの国々で文化遺産保護のために行ってきた長い経験と幅広い知識を披露してもらおうとも考えています。このシンポジウムが、シリア文化遺産の未来のための、幅広くかつ自由な意見交換の場となることを願っています。

シンポジウム「シリア文化遺産の未来を考える」 イントロダクション

常木晃 (筑波大学教授、日本西アジア考古学会会長)

本シンポジウムは、内戦後のシリアの文化遺産を、どのように保護し、修復しそして活用するかについて話し合うことを目的としています。シンポジウムの参加者は、シリアからの参加者ととともに、今日手にすることのできる資料と情報に基づいて、シリア国内の文化遺産の現状を整理し、戦後の復興過程を描きます。シンポジウムではドキュメンテーションを重視しますが、それは遺跡など文化遺産の破壊状況を記録するという意味だけでなく、各文化遺産の学術的な記録も意味しています。なぜならそうした記録が、シリア文化遺産の将来にとって限りなく重要であると考えるからです。それは、シリア文化遺産を破壊から護るために考古学という学問がどのように貢献できるかを示すことに他ならず、戦乱の時期にはこうした活動が特に重要であると考えます。シンポジウムの究極の目的は、シリア文化遺産の保護に取り組んでいるシリアの考古学者たちを勇気づけることにあり、シリア文化遺産に対する日本西アジア考古学会の取り組みについても紹介します。

「シリア文化遺産の現状と将来への展望」

アハマド・ディーブ (シリア古物博物館総局博物館局長)

シリアで内戦が勃発した2011年以来、遺跡や歴史的建造物、博物館収蔵品など、シリア文化遺産の破壊、損傷、盗掘などが続いています。こうした未曾有の危機の中、シリア古物博物館総局は、破壊に直面した文化遺産の保護や修復などに努力を傾けてきました。この発表では、過去5年間の古物博物館総局の活動の概要を紹介するとともに、マスメディアでも散発的に取り上げられてきた最新の情報を提供していきます。そしてそれ以上に私たちは、内戦後のスキームについて考えられることを述べていくつもりですが、そのスキーム策定には様々な組織や研究所による国際的な支援が不可欠です。

「隣国の危機：レバノンから見たシリア文化遺産の状況」

ジャンニ・アブドゥル＝マシーフ (レバノン大学教授)

レバノンはシリアの西側に隣接し、社会的経済的にシリア危機の影響を大きく受けてきました。文化遺産に関して、レバノン政府は隣国シリアからの文化財の不法輸出を止めようと努力を続けてきました。シリア当局との合意に基づいて、不法輸出されようとした多くの文化財を国境で確保し、シリアへ返還しています。1975年から91年まで続いたレバノン内戦は、レバノンの文化遺産にも大きな被害と破壊をもたらしました。こうした状況から、レバノンの考古学や遺跡、歴史的建造物がどのように復興してきた

のか、内戦下と内戦後のレバノンの経験を振り返ることは、現在危機的状況にあるシリア文化遺産の将来の復興へ向けて、様々な示唆を与えるとともに必ずやその復興に寄与するものと思われま

「パルミラ救済プロジェクト」

ロバート・ジュコウスキー (ワルシャワ大学考古学民族学研究所)

ISの占領からパルミラが解放された僅か数日後に、シリア古物博物館総局からの要請でワルシャワ大学のチームがパルミラ入りし、激しく破壊されたパルミラ博物館の中に残された遺物の救済と保存プロセスの援助に着手しました。2016年5月6日までに、200点に上る石のレリーフと、装飾漆喰や織物、先史時代遺物などの搬送準備が整えられました。本発表ではこの活動の主な問題点や、パルミラ文化財の同定、カタログ化、保存の将来プロジェクトについて議論していきたいと思

「シリア文化遺産の将来：パルミラ文化遺産への日本の取り組み」

西藤清秀 (奈良県立橿原考古学研究所技術アドバイザー)

文化遺産の記録技術は現在ものすごい勢いで進化しています。これらの新しい技術は文化遺産の保存や保護にとって有用な道具となり得ますが、それはとりわけ破壊に直面し将来の状況が危ぶまれる文化遺産にとって重要です。レーザースキャンによる3Dデータの集成は、対象物を正確に再現することが可能な新しい再生技術です。シリアのパルミラでは、多くの貴重な歴史的建造物が破壊や盗難の危機にありますが、日本隊は以前から3Dレーザースキャンによってこれらの建造物を記録してきており、それは将来の修復や復元のための重要な助けとなるはず

「イラク文化遺産の復興における日本の貢献」

松本健 (国士舘大学教授)

2003年3月20日に勃発したイラク戦争の後、イラク国立博物館の略奪という悲劇が起こり、また遺跡の盗掘が横行するようになりました。このような状況に対処しようと、UNESCO代表団が2003年5月から6月にかけてイラクに派遣されました。それに加えて、イラク文化遺産の復興を目指して、国際会議がパリと東京で開催されました。これらの会議では、国際社会に向けてイラク文化遺産復興への支援アピールが出され、イラク専門家の養成やイラク国立博物館保存修復室の再建などが提起されました。こうした提起に沿って、国士舘大学は、JICA(日本国際協力事業団)やUNESCO、ヨルダン文化財局などの支援を受けて、2005年から2010年の間、ヨルダンのウム・カイス

(古代名：ゲラダ) 遺跡においてイラク専門家養成コースを開催してきました。本発表ではシリア文化遺産復興に向けて、こうしたイラクでの経験をお話いたします。

5. おわりに

2015年12月のベイルートでの「シリア考古学・文化遺産国際会議」“International Syrian Congress on Archaeology and Cultural Heritage (ISCACH : Beirut 2015)”の開催は、日本西アジア考古学会とシリア文化遺産関係者及び海外のシリア研究者との紐帯を強める契機となったと思われる。また、シリア側文化財関係者の日本への期待は大きく、今回、特にシリアから招聘したアハマド・ディーブは、2011年以降の内戦激化後に来日した初めてのシリア人考古学研究者であり、シリアに住むシリア人として政府

側に属するものの、政治色を出さず今日のシリアの文化遺産が置かれている状況を淡々と京都、奈良、東京で話をしてくれ、シリアの現況の一部を知ることができたことは、今後のシリア文化遺産支援にとって非常に良かったと考えている。

今なおシリアの和平に関しては混沌とし、その行方ははっきりせず、なお戦火は鎮まる気配はない。日々、人命は失われ、文化遺産も同じ運命を辿っている。しかし、我々、日本西アジア考古学会は微力であっても、シリアの文化遺産への支援とシリア文化遺産関係者との情報交換の継続の必要性を強く思うと共に、それは何も学会として組織としてではなくても、会員一人一人の支援交流も重要だと考える。

西藤 清秀

奈良県立橿原考古学研究所

Kiyohide SAITO

Archaeological Institute of Kashihara,

Nara Prefecture